

5周年集会 講演① 東日本土壌測定プロジェクトの成果♪

東京の国分寺にある「こどもみらい測定所」代表の石丸偉丈（いしまるひでたけ）さんに、東日本土壌測定プロジェクトの成果について報告していただきました。

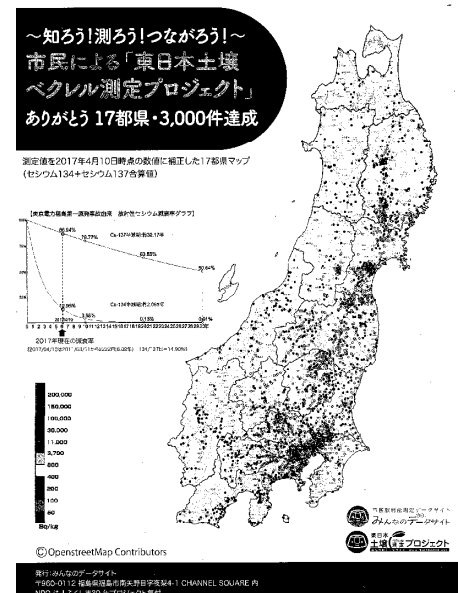
「チェルノブイリ事故の後、ロシア・ウクライナ・ベラルーシでは国の責任で「土壌測定」を行い避難・補償・作付制限の判断基準にしているのに、福島原発事故後の日本では航空機モニタリングと空間測定が中心で、汚染地域全土にわたる土壌測定を行っていない。だから汚染の実情がわからない。

国がやらないなら、市民がやろうと4000人の協力で17都県の土壌を採取、2年半で3000箇所以上の検体を測定。そのデータをもとに、未来まで汚染が続くことを示すマップをつくった。それも、極端なホットスポットを避けるなど、厳格なルールで行った。」

という、ものすごいプロジェクトだったことがわかりました。

100年後までの汚染の状態を示す「100年マップ」を見ると、半減期の短いセシウム134は減って汚染レベルが下がったように見えますが、これからは半減期30年のセシウム137が残り、汚染レベルがなかなか下がらなくなることがよくわかりました。2021年も2031年もほとんど変わりません。

この土壌汚染を基準に、日本も避難・移住・帰還を考えるべきだと思いました。（佐藤）



講演② 福島原発事故による健康被害をめぐる3つの立場

いまや京都測定所の顧問をしていただいているような渡辺悦司さんに、『福島原発事故の健康被害をめぐる3つの立場—政府・ICRP・最新の放射線科学から帰還政策・除染残土再利用を考える』というテーマで講演をしていただきました。

渡辺さんのお話はいつもデータが具体的です。

例えば8000ベクレル/kgの汚染土をリサイクルしたら、どれだけの健康被害になるかをモデル計算で出されました。8000ベクレルの根拠は、政府によれば年間1ミリシーベルト以下の被曝ですむということらしいですが、1億人が1ミリシーベルト被曝したらICRPの甘いリスク係数でも、年間4500人の死者が出るという、恐ろしい結果になりました。絶対に薄く広く汚染を拡散する政策など許してはなりません。

また、除染で出た汚染土を入れたフレコンバッグの山2000万立方メートルの中には広島原爆の5発分（広島原爆の放出量89兆ベクレルの5倍）の放射性物質が存在すること、つまり「死の灰」が積みあがっていること、絶対に住民避難が必要な状況にあることなどを話されました。

そして、放射線がもたらす健康被害が「がん」になるかどうかだけではなく、遺伝子の変異も含めて広範なものになるという、最新の科学に基づく根拠を示されました。

福島原発事故によって放出された放射性物質による健康被害を「確認できない」「分からない」という「放射線の専門家」は、「健康被害はない」とウソをつくのと同じだということ。そういう「似非科学者」に対し、公然と科学論争を挑んでいく「勇気」を持ってがんばりましょうと呼びかけられました。（佐藤）